



ガイドの育成研修では、ガイドとしての心構えや観光客の安全管理などについて、実習を交えて学んだ



国際協力の担い手たち

公益社団法人 日本環境教育フォーラム

(JEEF)

目指すは、住民が主役の観光

“幸せの国”として知られるブータン王国。しかし、観光の面では課題が多く、まだまだ発展途上だ。この国の観光に新たな魅力を生み出そうと、日本のNGOが挑戦を続けている。



美しい山々に囲まれたボブジカ村。湿原には越冬のためにオグロツルが飛来する



村の自慢や名物をまとめたマップについて説明するチョキさん



観光開発に生かされる 環境教育の考え

人里離れた静かな溪谷にある、ブータン王国のボブジカ村。毎年冬になると、黒い尾羽を持った鳥の群れが、ヒマラヤ山脈を越えて飛来する。絶滅危惧種に指定されているオグロツルだ。この村では、オグロツルをはじめとする野生生物や自然、地域の文化に触れることができるエコツーリズムの普及に住民一丸となって取り組んでいるが、その背景には長年この国が抱えてきたある問題があった。

ブータンでは文化・自然保護の観点から、観光客は必ず旅行会社を通じて観光ビザを取得しなければならない。そして、宿泊代、交通費、ガイド代などを含む旅行代金が事前に徴収され、一部は政府に税金として納められる。「この仕組みでは、旅行会社やホテルは一定の収入が期待できるが、それ以外の人は収入を得ることが難しい。また、祭りや寺院を回るといふ決まりきったコースが多く、リピーターが少なくないことも問題となっていました」。この指摘するのは、公益社団法人日本環境教育フォーラム(JEEF)の田儀耕司さんだ。

1992年に設立したJEEFは、自然体験を通じた環境教育の普及に取り組んでいるNGOで、環境分野における国際協力にも積極的に関わっている。5年前に日本でエコツーリズムの



ホームステイ研修には20人の住民が参加し、観光客に提供する料理を学んだ

地域の魅力が詰まった エコツーリズムを

とはいっても、ブータンでは地域住民が主役の観光はほぼ皆無。そこでま

ずは、政府・民間・自治体の関係者からなる委員会を立ち上げ、エコツーリズムに対して具体的なイメージを持つてもらうことにした。村の自慢や名物について住民から聞き取りを行ったり、マレーシアやタイで実際に行動しているエコツアーを視察したりした。「高いサービスを売りにするのではなく、地域の生活や伝統を観光客と共有することが大切だ」という理解が次第に深まりました」と田儀さんは振り返る。

その後いよいよ、村独自のエコツーリズムの確立に向けて準備を進めていく。住民を対象にしたホームステイ研修では、国王の結婚式で食事を提供した経験もある王立接客業研究所の職員を講師に招き、料理に加え、ベッドメイキングや室内の清掃などについて指導してもらった。地元ガイドの育成研修では日本人の専門家が指導を行い、9人のガイドが村に誕生した。また、シャクナゲやマツを使った置物や、羊毛を使ったアクセサリーなど、村にある素材を生かした土産品の開発も行われた。JEEFが協力するきっかけともなったチョキさんも、海外の文献を調べたり、さまざまな団体に連絡を取って情報を集めたりと、住民たちの活動を後押しした。

「進んでゴミ拾いを行ったり、家の掃除をする家庭が増えたりと、多くの住民が地域の自然や文化の豊かさ



シャクナゲの枝を使ったネームタグの土産品も完成した

を見直すようになりました」と、田儀さんは村に生まれた変化を実感している。そんな田儀さん自身は、政府機関との調整や進捗管理など、プロジェクトを陰から支えてきたほか、もう一つ重要な役割を担っていた。「せっかく住民ががんばっても、実際に観光客が来なければ成果が表れたとは言えないので、早い段階から日本の旅行会社などへの広報活動を展開しました」。これが功を奏し、まだプロジェクトが終了しないうちから、年間約300人の観光客を村に呼び込むことに成功した。

さらに今年1月からは、プロジェクトの場所をボブジカ村から西部の八県に移した。「住民が主体となって持続的に観光開発を行っていく体制を、よりいっそう確立させたい。そして将来的には、各地域の個性を打ち出して、この名物を食べたい、この地域の生活を体験したい」というような観光の選択肢を提供できればと思っています」と田儀さんは意気込む。人、自然、社会のつながりを大切にするというJEEFの心が、ブータン王国の観光に、新しい風を吹き込んでいる。